みづゑの側面觀

AWA　成　節　生

私は五月の新國民なる雜誌で左の記事を見た。

みづゑ　本誌は水彩畫專門の雜誌也、斯道の名流大下藤次郎氏が多年異常なる熱心によりて經營せし者なるが、氏沒後尙氏の門下及び知人によりて繼續刊行せらるゝは喜ぶべきこと也。一卷を擧げて水彩畫の描法及び之に關する興味多き話說を錄し、三色版、寫眞版、コロタイプ等に印刷せる名家の作を揭げて初學の範たらしむるなど、後進の指導を念とする本誌の用意を窺ふ可し。水彩畫に志ある人は須らく就て學ぶ所あれ。

と、こゝに錄して同好者に示し、あはせて「みづゑ」の發展を祈るのである。

天彩畫塾寫生紀行

大阪　T　生

もう五分も後れやうものなら取殘されやうと云ふきわどい所へやつと駈けつけると、續いて先生が來られる。おめずらしい、今日は洋服に鳥打帽、油のスケツチ箱、片手に三脚と傘御持參で靜かにあらはれる。皆脫帽、一寸頭の競技會、別にふるつた頭もなかつたが、H君のおしやか樣、M君の六甲山、やゝ異彩をはなつ、T君のライオン逸して影なき事久し。

豫定に遲るゝ何分か、ボーと電車は北に向つて走る。途中先生が居られるので皆々猫をかぶつておとなしい、やがて箕面につく。ぞろ〳〵と出た一行、探檢家然たる先生を先きに瀧路にそうて上る、瀧前で休んで更に上る事數町、瀧壺にそゝぐ流れで寫生ときまる。まつさきに先生が初められる、其附近の少さい場處をこゝかしこと、岩の上を飛んだり越したり一としきり騷ぎが有つて、皆それ〳〵落ついて靜まりかへる。特別念入りでひまのかゝる事甚だしい。そうと皆の樣子をのぞいて見ると、皆々熱心に所謂無我の境、中でも勉强家のE君や、君Hの筆は盛んに走る、殊にE君の岩や流れはお手のもの、お作も見事なのだ、反對のヅボラ組では釣好きのA君、手早く一枚片づけると、わざと殘した辨當の殘りをゑさに、ガーゼの絲で野生の竹を竿に岩陰にかくれて大公望をきめこむ。色の白いT君、人の繪ばかり見てはこんな所は柄にないと一枚も筆をつけず、無邪氣に岩の上を飛びまわる、後で聞いたら下駄が無慘だつたとは見かけによらぬ呑氣なお方也。こんな間に先生は傑作二枚を得られる、さすがはと目鏡越しに光る圓熟したお顏を拜して一寸恐縮。

暫時休んで後、一里餘の山路を勝尾寺迄參る。茶店で藥屋になりすまして、お茶やサイダーの一杯氣嫌で元氣よく元來た道を歸る。とかくA君が後れ勝ち也。コンパスが短かいからだとは誰やらの蔭口ばかしでもない樣子、都育ちのなれぬ山路には一

寸御難澁とお見うけ申した。
歸りの電車は何時だつたか、元より時計なしでたしかならず、だが何でも丑君が六時前とか云ふたのをチラリと聞いた。
淡い灰色に暮れてゆく夕やみにキラ〳〵と光る星のやうな電燈にそふて、車は南に流るゝやう梅田へ着いたのは何時だつたか

スケツチ

東京　秋葉

日があたつたかと思ふとかげるいやな天氣だ、同行四人、曰くY君、曰くT君、曰くA君、曰く僕、但し僕と云ふ名ぢやない、僕だ、A君盛んにシャベリ散らす、談笑又談笑、ずん〳〵歩くばかりだ、田端に來ると、パット開けた田野、筑波はかすかだ、花火が上る、麥は黄ばむてゐる、長閑かな、のむびりとした、いつ見ても好いあきない景色だ。歩きつかれて三脚をすへたのは、それから一時間ゆつくりすぎて後だつた、今まで雲雀のやうにさへずつた四人も、散兵線を張つたようになつてスケツチを始めた。空がドンヨリしてきた、變化のないつまらないのを一ツやつた。遠くに一帶の森、それから屋根のつゞき、麥畑が廣がつて近景は茄子の花が眞さかりだ。Y君印象派だつて、無暗に赤、黄、青をベタ〳〵ぬりつけてゐる。
一枚やつつけて、つまらなさそうにバタ〳〵箱にしまひ込む。まだ早やいからテニスをやらうつてポプラ倶樂部に行く、誰れもゐない、すぐ倉田先生がお出になる、Y君の下手には驚くばかり、第一ラツケットに球があたれば上の部、少しつかれた頃中川先生がお出になる、O君S君四人ばかりドヤ〳〵來る、吉田先生も藤井先生もお出になる、夢中になつてやつてゐるうちに球が見えなくなつたので止した。しばらくやらないでゐたので腕や足が痛む、腹がへる、上野公園に來た時は歩くのもいやになつた。

失敗記

大阪　洗帆生

旅に持物(モチモノ)が多かつたので、三脚を持參しなかつた、處が翌日寫生に行つた、暑いので神社の森の中へ入つて神前の銀杏の木を寫さうと場所は定まつたが土の上へどつかりは困るしと云つて別に何ぞとそこらを見ると幸ひ宮の軒下に瓦が四五枚あるのでそれを、丁度よい場所へ持つて來て腰をかけて始めた。處が半にして足やら腰の邊がイヤにムヅ〳〵するので見ると、小さな蟻の奴がゾロ〳〵這つて居る、吃驚して立ち瓦を一枚上げて見ると下には幾萬と云ふ蟻軍が地震とても問違へたか玉子を啣て宿替の最中、之には閉口だ、切株のある處は日がさして居るし、手水鉢の方では位置がいかん、百計盡きてスケツチ箱を土の上へ置き自分は吉田先生の眞似をしてやつと畫までに書上たが隨分苦しかつた、立上つても脚氣でしびれた足のやう、歸つて見ると筆洗の中で四五匹蟻の奴が土左衞門になつて居る、これは筆